

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
氏名 彭 柯然

【論文題目】 川端康成初期作品研究－翻訳文学との関係を中心に

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ノーベル文学賞受賞者であり日本近代文学の一時代を代表する作家川端康成（1899-1972）の1920年代を中心とする初期作品群を考察の対象として、後年に「日本的」叙情や「伝統的」美意識を体現すると評される川端文学が、その出発期において広く西洋文学を中心とした翻訳文学からの顕著な影響を受容しており、同時代の外国文学の持続的な影響の下で形成され発展したことを検討した論考である。

本論文全体は、序論、第一部（全三章）、第二部（全二章）、そして結論から構成される。序論では、川端の初期作品を考察する際の翻訳文学の影響という観点の重要性を提起し、特に川端が作家出発期に行った各種の翻訳行為がその文体形成に密接に関係したとして、近年公開された新資料を含めた川端による翻訳作品の分析の必要性を指摘する。また、初期川端文学におけるいわゆるモダニズム的な性格を解明する上で、同時期の川端の都市小説に現れた翻訳小説の影響の検討の重要性を提示する。序論での問題提起を承けて、第一部第一章は、川端が作家出発期の1922年に行った英文学とロシア文学からの3つの翻訳作品（ジョン・ゴールズワージー、ロード・ダンセイニ、アントン・チェーホフの各原作）を分析し、その翻訳文体の特徴と川端の掌編小説との関連を検討する。同第二章では1926年に刊行された中国文学の翻訳叢書『支那文学大観』所収の川端による唐代小説の翻訳を考察し、同時期以降の川端の小説テーマへの影響を論じる。同第三章ではハンガリー出身の作家モルナール・フェレンツの戯曲「リリオム」を翻案した2012年公開の未発表小説「星を盗んだ父」を対象に、森鷗外のドイツ語からの同作品翻訳と比較しつつ、同時期の川端作品へのモチーフの連続性を論じる。続く第二部では、同第一章で川端の浅草を舞台とした都市風俗を描いた小説として知られる『浅草紅団』（1929-1930）について、同時期のプロレタリア文学に加えて同時代アメリカのドキュメンタリー文学の運動からの影響を検討する。同第二章では『浅草紅団』と同時期に春陽堂から企画刊行された世界都市をテーマとした翻訳文学叢書『世界大都会尖端ジャズ文学』を対象に、ヨーロッパとアメリカの同時代都市を描く一連の翻訳小説と『浅草紅団』を比較考察する。結論では各章の分析を踏まえて、川端が出発期の文学活動で行った一連の翻訳や翻案の実践、また同時代の翻訳作品からの持続的影響が、川端の作家としての自己形成と確立に果たした重要性が確認される。

本論文の示す新知見と独創性は、以下の三点に要約される。第一に、先行研究が比較的に手薄であった川端初期の翻訳・翻案作品を対象として、その作品の文体を含めた詳細な分析を通して、同時期の作品との共通性を指摘したこと。一連の唐代小説の翻訳、また翻案「星を盗んだ父」について、近接する時期の複数の川端作品への影響を指摘したことは新見である。第二に、小説『浅草紅団』の分析において同時代文学との新たな比較を通して、同時期の川端文学を理解する上での新たな評価の枠組みを提示したこと。ドキュメンタリー文学としての同作品理解は新たな川端文学評価の可能性を拓くものであり、従来考察が乏しかった叢書『世界大都会尖端ジャズ文学』との比較分析も、研究上の新たな視点を提供する。第三に、本論文全体を通して、川端文学を考察する上での翻訳文学の影響と受容という観点の有効性を確認したこと。本論文の対象は初期文学に限定されるが、以後の時期の検

討も含めて、今後の発展の余地は大きい。

以上の通り、本論文は、川端康成初期作品と翻訳文学との関係の分析を通して日本近代文学の研究に新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、平成31年1月25日（金）に実施した最終試験（口頭試問）において、博士学位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また平成31年1月26日（土）に開催された学位論文公開発表会において、博士学位論文の主旨についての的確な発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査 坂元 昌樹

委員 西槇 偉

委員 屋敷 信晴

委員 瀨田 明